

A scenic view of a lake with a wooden dock, a boat, and trees under a bright sky. The text is overlaid on the image.

『社会をつくった経済学者たち』 へのコメント

2023/3/17

徳丸 宜穂

(関西大学)

本書の問題意識と内容(1/4)

- 「経済学者がスウェーデン社会の形成過程に与えた影響を明らかにする」
「スウェーデンの経済学者は・・・「社会をつくった」のであり、それこそがスウェーデン経済学史の最も注目すべき特質」(1)
- 「本書はスウェーデンの経済学史研究とともに、スウェーデン・モデル研究を意図している」「スウェーデン社会への経済学史的アプローチ」
「スウェーデン社会の成り立ちの解明に経済学史研究はかなり有効」(5)
「経済学史からの考察は、スウェーデンの経済だけでなく政治や福祉の性質についても新たな理解をもたらすだろう」(6)
- 「(本書の考察)には社会と学問相互の建設的な影響関係を見出すことができるだろう」(14)

本書の問題意識と内容(2/4)

○第1部：「第1世代」の経済学者の理論と社会改革への関心・無関心

- 社会改革指向のヴィクセル vs. 保守主義・自由主義のカッセル・ヘクシャー
- ヴィクセル：**社民主義**への共感／混合経済・**福祉国家**を展望／市場経済への賛同
- カッセル：自由主義と社会主義を批判／「協同組合や労働組合のような**自発的組織**が中心的役割を果たすべき」(106)

⇒のちの**北欧モデルの特徴**が既に出揃っている点が興味深い

○第2部：「第2世代」と学派の成立，経済政策への大きな貢献

- 「失業委員会」(1927-35)／経済学者の参画⇒「学派」／財政・金融政策
- 経済運営の成功→社民党長期政権(1932-76)＝「モデル」形成を可能に
- 経済回復→ミュルダールとオリーの「分岐」：福祉政策／自由主義・自由党

⇒混合経済を認める論者の中も、**まったく一枚岩ではなかった**

本書の問題意識と内容(3/4)

○第3部：ケインズ革命と「学派」の盛衰

- 「彼らが集結する最大の理由としての**景況**・・・が変化し、また共通の・・・プラットフォームが失われ(…)ると、「集団」は急速に解散に向かった」(310)
⇒**不況**が凝集させていた集団
- オリーン「社会的自由主義」自由党に／ミュルダール「普遍主義的福祉」へ

○第4部：スウェーデンモデルの形成と「第2世代」の経済学者

- 社民党 vs. 自由党（党首オリーン）：社民党はオリーンの批判をある程度**受容**
⇒**政権維持**／「**白熱の議会論争を通じて福祉国家が次第に建設された**」(322)
cf. 社民党「自由選択社会」：**公的介入・社会保障あってこそ**の自由選択
⇒**自由党との論争のお陰で進化した**といえる
- レーン・メイドナー(RM)モデルの形成／付加年金制度の形成

本書の問題意識と内容(4/4)

(承前)

● 「福祉国家の危機」とスウェーデンモデル

「スウェーデンでは、この時期に(…)存在感を増してきた自由や市場経済にまつわる議論、さらに「新しい社会的リスク」の議論も、**福祉国家形成の当初からかなりの程度織り込み済み**であった」(350)

○ハイエク流の福祉国家批判：カッセル、ヘクシャー(1920-40)

○ワークフェア路線：すでに就労規範強い／ALMPは既定路線

⇒つまり、**既に議論済み・織り込み済み**であったことが耐久力を生んでいる

● 終章「論議を学界内にとどめなかったこと、つまり**公共論議への積極的貢献**が際立っている」というのが、スウェーデン経済学史の特徴(378)

● 「社会民主主義陣営と自由主義陣営が常に議論を闘わせてきた」が、「政治家の対抗はもちろんだが、(…)世論に大きな影響力をもっていた**経済学者の対抗も重大**」(381)

本書の意義と考えられる点(1/2)

1. 私見では、**葛藤・対立を含む経済学者の議論**が、スウェーデンモデルの形成・進化にとって枢要な意味を持っていたという指摘には、大きな意義がある

- **単なる妥協**ではなく、社民党の「**自由選択社会**」のような新規性のある構想を生み出す**進化圧/evolutionary pressure**として作用した
- 新自由主義的な批判を既に受けていたから、1970年代以降の批判に対して**レジリエンス**を獲得⇔もちろん「**改革**」の**行き過ぎ**も生みかねないが・・・
(e.g., 福祉サービスなどのアウトソース, 株式会社学校, バウチャーシステム)

※民間企業での効率化手法の採用：非イデオロギー的・実利指向／**戦前から** (Karlsson 2016)

- 葛藤・矛盾を含む**協議・対話の場**を作るとは、北欧の特徴 (cf. 公共空間)
- 個々の経済学者が重要だっただけでなく、やはり、**葛藤・対立を含む経済学者集団**こそが重要だったことは、もっと強調されても良かった
⇒交配＝新規性の創出可能性を高める

本書の意義と考えられる点(2/2)

2. スウェーデンの経済学者の特質として、理論的な優越性のみならず、**公的議論への積極的貢献**という点を析出していることにも大きな意義

- ヴィクセル、カッセル、ミュルダール、ヘクシャー、オリーン et al.の理論的傑出性は既知のこと
- ミュルダールが普遍主義的福祉の概念を生み出したこともよく知られていること
- しかし、公的議論への関与・貢献が、**スウェーデン経済学の一貫した特質**であることを明らかにしたことは、北欧研究にとっても新しく重要な知見
- 学派の凝集力が**不況**によってもたらされていたことは、その象徴でもあろう

コメント(1/4)

1. **RMモデルがスウェーデンモデルの中核の位置を占めることを考えると、両氏に関する検討が本格的に欲しかった**

●彼らがLO（労働総同盟）のエコノミストだったことは、RMモデルの構想にとっていかなる意味を持ったのか？

=アカデミーに繋がりながらも所属しなかったことの意味

→**現代の経済学者の布置とその含意**という問題につながる（→コメント#2）

●いかなる大きなパースペクティブの下で、彼らはRMモデルを提起したのか？
あるいは、当初はインフレ対策であったのか？

コメント(2/4)

2. アカデミーの経済学者，ないしアカデミー自体が担う「**社会をつくる**」**役割**について，本書の時代と現代スウェーデン・北欧ではいかに連続・断絶しているのか

- Myrdalに相当する**大きなビジョン**をつくるのは，しばしば非営利のシンクタンク (e.g., Demos Helsinki: basic asset構想⇒政治学，哲学，経済学などの博士多数) = 次頁参照
- 財務省や銀行のエコノミストという存在が大きなものに(1980s-) (Mudge 2018) (e.g., BI実験の計画: 金融グループNordeaのエコノミストらによる) = 次頁参照
- 少なくとも大きな構想を，アカデミーの人は出していないようにみえる
⇔ **アカデミーの外にいるアカデミックな人**が出している
- 他方，アカデミックな経済学者のテーマは社会的ニーズを反映しているよう
= 次ページ参照

コメント(3/4)

Abstractに各語が含まれる論文の割合(1976-2023)

	labor	welfare	health	education
<i>Scandinavian Journal of Economics</i>	13.9%	6.9%	1.3%	3.0%
<i>American Economic Review</i>	7.6%	2.5%	0.9%	0.7%

(*Web of Science* による)

New chief economist at Arena Idé



Today, Elinor Odeberg starts as chief economist at the think tank Arena Idé. Elinor Odeberg most recently comes from the Ministry of Finance.

- The employees need a voice in the economic debate. It is especially important in a situation of high inflation and impending recession. Often the interests of the banks and the business world are left unopposed, says Elinor Odeberg.

- Arena Idé has a unique position as a cross-union funded think tank and I look forward to contributing to a progressive social debate. As chief economist for Arena Idé, I will focus on distribution policy and welfare financing, says Elinor Odeberg.

- This means an important strengthening of our opinion formation. Elinor Odeberg will contribute with sharp analyzes and build an important network of economists and experts, says Lisa Pelling, director of Arena Idé.

About Elinor Odeberg

Elinor Odeberg most recently came from a position as a political expert at the Ministry of Finance with special responsibility for international economic policy. Elinor is an economic historian with solid investigative experience, including as chief investigator for the Social Democrats and investigator at the municipal union, and has a background as a debater and writer.

コメント(4/4)

3. 経済学者の議論を受容するスウェーデン社会・政治の諸条件について

- 経済学者を含む**専門家は社会的に重視されている**のではないか？
例：憲法の規定（福島 2022）／コロナ対応での専門家の役割
- 実質的な議論・審議を含む委員会
- **専門家の社会的位置**を念頭に置かないと、「社会をつくる」経済学者がなぜ、いかに有効だった／であるのかも、十全に理解できないように思われる
- これは結局、コメント#1およびコメント#2にも関連することである

疑問・質問

1. 経済学者が「世論や政治に強い影響を持ち、それらの展開に積極的に関与した」(1)というのには、異なる形ではあれ戦後日本の経済学者の諸グループにも見られたと思われるが、それと比較した場合の**スウェーデンの顕著な特徴**はどこにあると考えられるか？

※「大内グループ」(大内兵衛, 有沢広巳, 美濃部亮吉ら: ローラ・ハイン 2007 『理性ある人びと 力ある言葉』岩波書店) や都留重人らがまず想起される

※左派内部のイデオロギー的抗争が影を落としていることは否定できないが

2. 現在の北欧諸国や日本を念頭に置いた場合、**「社会をつくる経済学者」に対する需要**は、どのような形で存在・顕在化しうると考えられるか？

●問題が大きくなりすぎる前に解決してきた＝根本的再設計の必要に至っていない？

●漸進的・部分的改変を数多く実施＝「実験国家」(岡澤 2009)

補助スライド

GDP成長率(年平均 %)

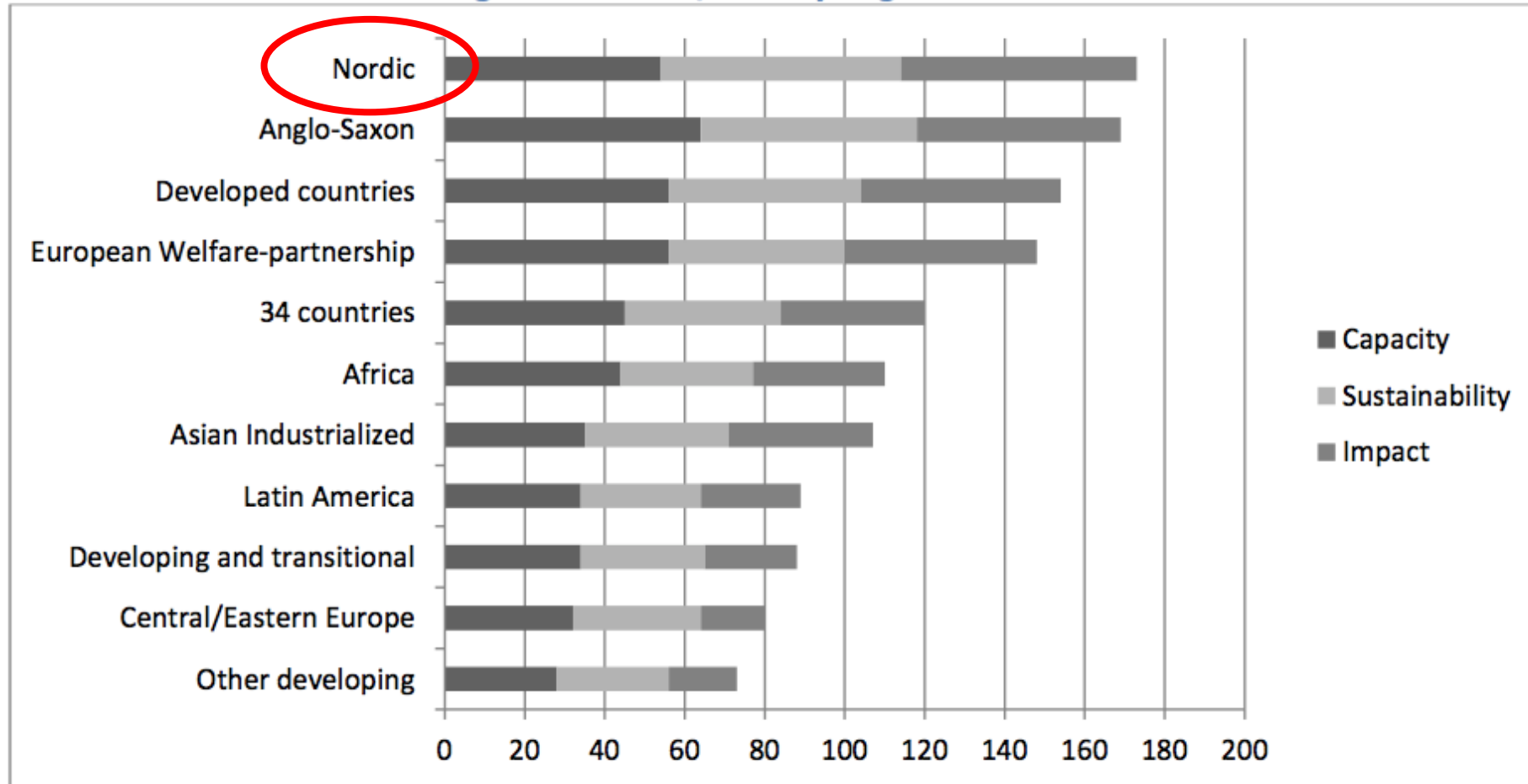
	1976-86	1987-97	1998-2008	2009-2021
米国	3.51	3.12	2.82	1.71
英国	2.39	2.72	2.42	1.09
日本	4.18	2.99	0.80	0.27
ドイツ	2.36	2.44	1.57	0.95
フランス	2.47	2.26	2.23	0.80
イタリア	3.06	2.04	1.28	-0.38
スウェーデン	1.77	1.59	3.10	1.85
フィンランド	3.01	2.08	3.53	0.39

労働生産性伸び率(年平均 %)

	1964-74	1975-85	1986-96	1997-2007	2008-18
米国	2.05	1.22	1.43	2.14	1.14
英国	3.79	3.15	2.09	2.05	0.24
日本	7.61	3.26	3.17	1.68	0.79
ドイツ	5.21	3.28	2.52	1.30	0.83
フランス	5.90	3.58	1.76	1.76	0.82
イタリア	6.79	2.81	2.37	0.39	0.08
スウェーデン	4.12	1.40	1.51	2.20	0.86
フィンランド	5.27	2.53	3.00	2.74	0.57

サードセクターの数・持続可能性・インパクト

Figure 1.17: JHU/GCSI by Region¹⁷



Source : Salamon and Associates, Global civil Society: Dimensions of the Nonprofit Sector vol 2 (2004)